



## 地域を守る形、 行政と民間が連携して模索を

—「地域密着型建設業」として、  
村を維持するためにできること—

九戸郡野田村

(株)晴山石材建設 代表取締役 晴山 克身 氏

**—震災から2年余り経過し、ここまでの取り組みを振り返ると。**

旧市街地にあった会社も自宅も流失してしまい、当初は廃業も覚悟しました。ただし重機が6台ほど残り、付き合いのあるリース会社も対応してくれるということで、野田村地域整備協会で災害廃棄物の撤去に当たりました。

震災後8カ月ほどは役場に詰めっきりで、会員企業の担当の割り振りや、建設業協会久慈支部からの応援部隊との調整などをしていました。がれきの撤去に没頭することで、つらさを紛らわせることができたのかもしれませんが。

**—野田村は、応急復旧からいち早く高台移転などに事業着手したイメージがあります。**

県内でも早期に事業着手したことで、進んでいる部分もありますが、ある地区では区画形状などに課題があり、地元住民の意向に沿わないため設計を作り直している部分があると聞いています。また土砂の移動先の選定に戸惑ったり、用地の問題から工事用道路が決まらない地区もあるそうです。

特殊な工事が多いためか、設計、用地、住民説明がマッチングしていないという指摘も耳に入っています。また自治体の方も、被災者の方に安心してほしいという気持ちでしょうが、他自治体に先駆けての事業着手や早期発注にこだわりすぎているように

も感じます。

**—行政と地元業界との距離感はどうでしょうか。**

比較的良いとは思いますが、受注者側の目で見ると、マンパワー不足の中で発注業務に追われているように見えます。また特殊な工事の査定結果や設計が実情と合わず、価格面での折り合いをどうしても付けられないケースもあります。

さまざまな課題解決に向けて、自治体トップには発注標準額の引き上げや、近隣工事との技術者の併任などを要請しており、当局もある程度前向きな姿勢を示しています。

**—業界側の体制はどうですか。**

マンパワー不足は行政側だけの課題ではありません。村内の建設業者数を見ると、土木工事業は以前13社だったものが現在は5社。建築工事業も13社から6社にまで減っており、企業数が増える要因もありません。社員にいたっては3分の1から4分の1まで減っているのが現状です。

震災前は人員削減を続けてきたのですが、現在はどこの会社でも技術者を何人でもほしいのが本音。私の会社では、若い技術者でオペレーターの仕事もできるような万能型の技術者を養成しています。完全月給制にして社会保険など福利厚生もしっかりとかけて、次世代への技術・技能の継承を進めています。

す。女性の技術者やオペレーターの数も増やして、できれば30%程度は女性オペレーターにしたいと思っています。

### —地域における業界の姿を考えていく必要もありそうです。

将来の自然災害への備えとして、どのような形で技術者や技能工、それらを抱える企業を地域に残していくか。ここを民間側だけではなく、行政と連携しながら模索していかなければならないと考えています。たとえば国土強靱化計画に従い、事業費が平準化されていけば、ある程度の技術者数を確保しながら経営ができる可能性もありますが。

野田村役場には維持部門がないため、地域整備協会が少額工事を受注し、会員企業で分担しながら仕事をするスタイルを震災前から取っていました。これが震災直後の対応にも役立ちました。いわゆる地域維持型契約に近い形態と考えており、これを一つのモデルとして考えられるかもしれません。

### —震災から2年経過した今、伝えたいことは。

自らを守るためにも、先人の知恵に学ぶことが大切だと思います。土木屋としては土木構造物だけで人命を守りきれないことには複雑な思いはありますが、神社仏閣のある場所の多くは被災を免れていることから考えても、高台への避難が一番。そのためにも定期的な避難訓練を惰性でなくしっかりと行うことが重要であり、また避難場所のあり方や、高齢者が多い中で備蓄食料が堅い乾パンでよいのかなど、幅広く考えていく必要があると思います。

数年前の事業仕分けでスーパー堤防がやり玉に挙げられたことがありましたが、国土強靱化に向けては、強固な土木構造物の整備も忘れてはならないと思いますし、海辺にある公共下水道の浄化センターが被災して汚水処理能力が毀損した反省も生かし、社会基盤の配置なども考えていく必要があると思っています。



野田村城内地区 高台移転造成工事



## 復興に向けて、ずっと走り続けたい

—地元漁業関係者の思いを受け止めながら—

宮古市

大坂建設(株) 常務取締役 伊藤 亮 氏

**—復旧・復興の現場を束ねる立場として、配慮していることは何でしょうか。**

工事部のトップとして、入札関係や工事受注後に現場に誰を配置するかを考える立場です。適材適所の配置とするため、得意・不得意な分野を見極めなければなりません。どこに住んでいるかも考慮します。仮設住宅、山田町に住んでいるなど、なるべく近いところへの配置に配慮しています。

資材、人、労働力などが不足し、施工計画・工程表通りにはなかなか進まないのが現状です。技術者の負担も大きいため、いかに技術者の負担を解消するかに気を配っています。今現場で働いている人は、震災前と違って精神的に厳しい部分があります。サポートすることが大切です。

今までやってきた復旧工事は海中工事がほぼ100%です。新しく作るものと違い、撤去など目に見えない部分がほとんどになります。潜水士を海中に入れ、想像しながら絵を描いたりもします。熟練の潜水士は、やりとりが分かりやすく、潜水士も地域に精通した潜水士を選んでいきます。

**—海の工事を進める上では地元の皆さんとの付き合いも重要ですね。**

地元漁民の皆さんの顔はすぐに分かります。震災後しばらくぶりに会った漁師さんに『大坂さん、見捨てねえでよく来てくれた』と声を掛けてもらいました。皆さんの早く港を直してほしいという思いは痛いほど分かります。われわれも人員不足、資材不

足でなかなか出来ませんでした。昔から工事でご協力をいただいた皆さん。何とかしたいという気持ちが強いです。

海には漁船があり、漁民が生活しています。漁港など一部を復旧することになりますが、工事的には全体をやることになります。どこに船を着ければいいのかなど、細かい工区分けが必要となります。工程としても遅れる部分も出てしまいます。

**—特に困っていることは何ですか。**

最近では資材関係の調達、特に石材が入りません。ただ、石材が入ってきても積み出し岸壁もありません。同じ港でも数社が入って工事することもあるため、限られた狭いところでの作業を強いられ、思うように進まないのが現状です。

海から陸に上げて壊したとしても、中間処理場に持っていきません。壊しても山積みになっています。本体構造物の基礎だけは早く進める必要があります。海中に仮置きしておくことになります。仮置きしたものについても後で上げなければならない。ひとつの工程でできたものが、2回3回の手間が必要となります。もう少し早く工事を進めたいのですが、コスト面から見ても厳しい。毎月の進捗率もなかなか見えてこない中でも、やるしかないという気持ちで取り組んでいます。

組織力、技術者にしても人数的に限界を感じることもあります。やらなければならないと無理してこなしてきましたが、これ以上やっては技術者を潰し

てしまいかねないと考えています。

**―震災後の体験で印象的だったことは何ですか。**

プラスになったのは貴重な出会いが多かったことです。震災後は初めて県外の皆さん、多くの業者と知り合いました。資材、電気、機械関係など何人とお会いしたでしょうか。助けてくれる人とも知り合えました。県外から来て働いている人は、復興にかけるイメージをしっかりと持っています。一所懸命働いていただき、本当に感謝しています。

具体的には船の種類を教わったり、さまざまな機械があるんだと勉強になり、人間性も学びました。分からないことがたくさんあって、これで正解なのかと考えることもあります。人によってさまざまな捉え方があり、精神面での支えになっていただいています。

**―建設業の未来を担う若手を地域で育てることも大切になります。**

会社では震災後に数人雇い入れました。将来的な不安要素もありますが、若返りは必要な要素だと思っています。建設業はやればやった分だけ成果が見えてくる。そして現場にはおもしろみ、嬉しさがある。大変な仕事ですが、今、嬉しさを強く実感しています。

**―今、担当している現場はありますか。**

今は大浦漁港の災害復旧に取り組んでいます。冗



震災後の5月、こいのぼりを海上であげる

談話も交えながら、地元の皆さんも協力してくれています。人柄が良く温かみもあります。地元とコミュニケーションを図りながら、現場をこなしていきたいです。

**―地元業者として震災復興に込める思いをお願いします。**

東日本大震災では被害の大きさに呆然として、頭の中が真っ白になりました。でも今までお世話になった地域、われわれがやらなければ誰がやるのか。地域が頼りにしてくれている、それに答えなければなりません。

お世話になった人の顔、被災した皆さんの顔、亡くなった同僚の顔を今でも思い出します。復興にかけるいろんな思いがあります。ずっと走り続け、終わるまで走り続けたいです。



## 建設産業界全体と協調し、復興に貢献

### —インフラの基盤を提供する資材商社の役割—

大船渡市

橋爪商事(株) 取締役専務執行役員 佐々木 敏彦 氏

#### —震災当日はどのような対応を。

盛岡市に向かっている途中、遠野市小友町の産直付近で地震に遭いました。電柱も倒れそうな勢いでしたから、慌てて大船渡に引き返しました。権現堂橋の辺りで盛川を船が逆流し、市役所手前から海側を見ると車が流されていました。

会社が指定している避難場所の先にある高台に社員たちが避難していたので、社員や弊社の展示会に来ていた県外のお客様には、近所にある私の自宅に避難していただきました。お客様には、結局10日ほど避難していただいたと記憶しています。

#### —会社や生コン工場も相当の被害を受けたと聞いています。

気仙川沿いの高田レミコンは壊滅。大船渡レミコンはデータと事務所が流出しましたが、コンベアや

ミキサーが無事でした。本社の方は、大津波警報が発令中だったので、社屋に入れたのは地震から3日後でした。

3階のフロアまで浸水していたのですが、幸いなことにコンピューターが無事で顧客データが喪失していなかったため、事業再開時には大変役立ちました。現在では耐震対策をしたサーバ室を北上支店に移設し、盛岡のバックアップ機能も含め、2カ所でデータ管理をしています。

#### —震災直後の資材不足への対応は。

工事が始まれば生コンなどが必要になりますが、震災直後の応急用資材としては、コンパネや耐候性土のう袋のニーズが非常に高かったですね。コンパネは窓が流された場所への処置、遺体安置所などの間仕切り代わりにと枚数を使いますから、メーカー並びに内陸の各支店から集めてなんとか不足を出さないようにしました。

コンパネ、ブルーシート、耐候性土のう袋は分散して保管しておく必要があると感じています。加えて、食料や飲料水、毛布などは、本社や生コン工場に保管するほか、末崎の建材センターに備蓄基地を配置しています。

#### —地震発生時の行動計画も策定されていますね。

生コン工場では、津波注意報が発令された時点で生コンの製造はストップ。練っている最中の生コンは廃棄し、自動洗浄するというフローを決めていま



高田レミコン

す。また、ミキサー車や社員の車の避難場所も決めています。

社員の避難場所も決めています。逃げ遅れた社員のため、本社の塔屋に避難階段から通じる避難用のステージを設置しました。また生コン工場では、最終的にプラントの上への避難となります。実際に高田レミコンでは4人がプラントに上がって難を逃れています。

**—今後、資材不足も懸念されています。**

太平洋セメントさんからは「セメントは不足させない」と心強い言葉をいただいております。一方、骨材やミキサー車など問題は一つではありませんから、気仙協組内で定期的に情報交換しており、県南協組からもご支援いただいております。先が見通せない部分も多いのですが、建設産業界全体と協調しながら、復興に貢献したいと思います。



大船渡レミコン



## 海からの恩恵を享受し、 自然と共生する地域社会を

—復興における土木コンサルタントの責任と可能性—

大船渡市

(株)菊池技研コンサルタント 代表取締役 菊池 透 氏

**—地元の土木コンサルタントとして、震災当時を振り返るとどのような思いですか。**

弊社の社屋も背後にある盛川から津波が遡上し、1階部分まで水に浸かりました。自宅も被災し、コンサルという以前に被災者の一人として『この町はどうなってしまうんだろう』という思いが一番。このような仕事をしている以上、災害に背を向けるつもりはありませんでしたが、一方では絶望感もありました。

**—震災直後は、地元建設業界が道路啓開作業に当たりました。御社はどのような取り組みを。**

この震災によって道路が寸断し陸の孤島になってしまった箇所があり、早急に迂回路をつくる必要があるということで、発注者から大至急の測定の要請を受けました。機材も多くが流出し水をかぶってしまい併せて車両のほとんどが流出してしまいましたが、使える機材を持ち出し社員の車を借り上げて被災直後から現地入りしました。社屋も被災していましたので仮事務所を盛に借り、設計を盛岡、測量を一関と、内陸の支店に機能分担しながら作業を進めました。

**—コンサルも復旧の最前線にいたわけですね。**

現況を把握しないと工事に入れませんし、地質の状況によっては地盤改良が必要になるなど多様なファクターが入ってきます。このように測量設計業

は川上の分野ですが、残念ながら認知度は高くなく、建設業以上に光の当たらない分野と言えます。

人に認められるため働いているわけではないのですが、自分たちの仕事を正しく理解していただく努力を怠っていた点は否定できません。地域の建設業や測量設計業が安心な暮らしを守っていることを、理解していただく必要はあると思います。

**—土木コンサルとして、今回の震災の教訓をどのように見えていますか。**

大船渡や釜石の湾口防波堤を例にとると、確かに防波堤は破壊されましたが、しっかりと機能し千年に一度という巨大津波を減衰させた結果だと捉えています。もし、このような防災インフラが無ければ被害はさらに拡大していたかもしれません。公共土木施設は住民の安全と安心を担保するものであり、防波堤や防潮堤などのハード施設と、避難などのソフト対策をしっかりと組み合わせなければなりません。

**—インフラ整備に関わる立場としては、ハードで住民の安全を守りたいという意識もあるのでは。**

土木に携わる者として、その意識は否定できません。しかし津波を完璧に防ぐハード整備には途方もない予算が必要ですし、城壁のような堤防に囲まれた暮らしが、果たして『海の町』と言えるでしょうか。城壁の中で生きるのか、海や景観からの恩恵を

受けながら生きるのかと考えると、防災の観点だけがすべてではありません。自然と共存するため、ハードとソフトとの最適な組み合わせを考えていく必要があります。

**―御社では群馬大学の片田敏孝教授の講演会を開くなど、ソフト対策の重要性も意識されていますね。**

沿岸に住む私たち自身が、『つなみてんでんこ』を忘れていたことを、改めて思い知らされました。大船渡で亡くなった人の中には、前回のチリ地震の時にはここまで津波は来なかったと言って逃げなかった人も多かったと聞いています。

人の営みに最低限必要な社会資本と防災施設を用意し、人知を超えた災害には避難を基本としながら、ある程度は受容する姿勢も必要。海の恩恵を受けながら、自然の摂理にどう対処するかを考える生き方の方が良いのではないのでしょうか。

**―これからのコンサル業界の姿をどのように描きますか。**

現在復興に向け懸命に努力しておりますが、川上のコンサル業務は今年から来年に掛けて減少していくと思われます。その先は老朽化したインフラの保守点検や管理的な業務が中心になっていくと見ています。また、『コンサルタント』と呼ばれる以上、従来からの業務委託という形だけではなく、さまざまな提言やアドバイザー的なハードとソフトの融合を考えたサービスを提供していく必要があると考え

ています。

**―震災から2年が経過し、内陸部や県外では震災の記憶も薄れてきています。**

幸いにして当社の社員は全員無事でしたが、家族を亡くした社員もいます。震災の受け止め方はそれぞれであり、人の命が失われることは非常に重いことです。しかし沿岸に住む私たち自身にとっても、記憶の風化といいますか、現在が日常の風景になりつつある部分も否定できません。

また子供たちにとっては、今の何もない状態がふるさとの原風景になっています。被災前のまちの姿に戻すのではなく、希望の持てる新しいまちを作っていくため、土木コンサルとして何らかのお手伝いをしていきたいと思っております。おそらく、戦後の復興に携わった先人の思いも、きっと同じだったと思います。



社内の浸水地点を指し示す菊池社長





## 伝えていきたい 震災の記憶と教訓

— 一生かされた先人の体験を後世に伝えていく役割 —

田野畑村

佐藤建設(株) 工藤 美保子 氏

— 震災から2年が経過しましたが、現在の状況はいかがですか。

田野畑村では、集団移転の場所がすべて決まりました。私たちのところも造成や抽選が終わり、あとは家を建てるだけになりました。高齢の母がおり、早く仮設住宅から出してあげたい。新しいところが決まって、もう少し頑張ろうという気持ちになりました。今は家を建てる準備をしています。

— 移転先が決まることは、大きな一歩になるのですね。

仮設住宅での暮らしは、精神的につらいと思います。最初は一生懸命で、仕方がないという感じだったけれど、仮設住宅では、隣に住んでいる人のいびきまで聞こえてきます。今の方が、ストレスがたまっているのではないのでしょうか。移転先が決まることで、先が見えてきた感じがしています。

— 移転先への不安はありますか。

今度の移転先は、震災で津波が来なかったところだけれど、今は堤防などが壊れている状態です。次に同じようなことが起これば、津波がやってくるかもしれません。今は、堤防の整備を進めてほしいと思っています。

— 震災当時は、どのような状況だったのですか。

職場が上の方にあり、私は直接津波を見ていません。でも、高齢の母が家にいて不安でした。たまたま非番で家にいた主人が、母を逃がしてくれ、翌日には母と会うことができました。ただ、母は足腰が弱く、避難所では暮らせないだろうと思いました。けれど、家は津波で1階が全く使えない状態になってしまい、会社の2階を借りて過ごしました。

— 震災から2年。今、伝えたいことは。

震災や津波の恐ろしさを忘れてほしくない。そして、津波が来たら、とにかく逃げることです。主人は、おじいちゃんたちからの教訓を覚えていたから、ちょっとした津波でも逃げる方でした。

— 津波への教訓を伝えていくことも重要なんですね。

津波がきたら、とにかく高台へ。何も持たなくていいから、まず逃げなさいと教えていかないと。学校や家庭、さらには各種メディアでも伝えていってほしい。震災の記憶や教訓を伝えていくことが一番です。